『グローカル研究』

No.7（2020）21-34

Glocal Studies

マルセル・シュウォブのスティーヴンソン論
『宝島』への言及を中心として

鈴　木　重　周

成城大学グローカル研究センター PD 研究員

（受理：2020 年 1 月 8 日　採択：2020 年 2 月 10 日）

要　旨

1884 年の夏、若きマルセル・シュウォブは、ヴァカンスを過ごすために乗り込んだマルセイユ行きの列車の中で、ロバート・ルイス・スティーヴンソンの『宝島』（1882）と出会う。フランスにおいて当時ほとんど知られていなかったこのスコットランド人作家を、シュウォブは「文学の新しい創造者」と見なし、生涯にわたって師と仰ぎ続ける。

『宝島』を読んでからのシュウォブは、敬愛するスティーヴンソンに様々な形でアプローチし続ける。それは一種の執着と言えるほどのものだった。いくつかの先行研究は、シュウォブのテクストにスティーヴンソンの強い影響と彼へのオマージュを見いだしている。それは、シュウォブが幾度となく発表したスティーヴンソンに言及したエッセイからも明らかである。実生活においてもシュウォブは、南太平洋に渡りサモアに居住するスティーヴンソンに手紙を書き続け、自身の第一小説集を彼に捧げた。シュウォブにとっての晩年である 1901 年には、ついに対面することの叶わなかった師の墓参のために、病身を押してサモアへ赴いている。シュウォブという作家は、生涯にわたって常に一度も対面することができなかったスコットランド人作家の影響下にあったと言えるだろう。

「サモアの師」を理想の作家とするシュウォブが、スティーヴンソンの文学にみたものとは何であったのか。本稿では、シュウォブが残したいくつかのスティーヴンソン論における『宝島』への言及に着目しながら、両者の交流について伝記的側面と文学的側面から考察する。

キーワード：マルセル・シュウォブ（Marcel Schwob）、ロバート・ルイス・スティーヴンソン（Robert Louis Stevenson）、ユダヤ人、英仏交流、複数の語り手

はじめに

本稿は、マルセル・シュウォブ（Marcel Schwob, 1867-1905）が発表したロバート・ルイス・スティーヴンソン（Robert Louis Stevenson, 1850-1894）論を考察の対象として、シュウォ

ブという作家の文学観を検討するとともに、19 世紀後半における英仏作家の交流の一端を明らかにすることを目的とする。

はじめに、筆者の問題意識について確認しておきたい。筆者はこれまで、フランス文学史においてはいわゆる「世紀末」に数多く現れた象徴派の作家の一人として知られるシュウォブを、反ユダヤ主義の時代に生きたユダヤ系フランス人としてとらえ、そのテクストを「ユダヤ」をめぐる歴史的・社会的状況と照らし合わせながら読解する試みを行ってきた。ヨーロッパのみならず世界中に存在する、いわばグローバルな存在としての「ユダヤ人」は、19 世紀末フランスというローカルな場においてどのような存在だったのであろうか。本稿においては、作家としてのシュウォブが最も影響を受けた人物が英国人であったことに着目する。生涯にわたってスコットランド人作家スティーヴンソンを敬愛し、死後もその影を追い続けた。作家としてのシュウォブは、常にスティーヴンソンの影響下にあったと言えるだろう。本稿では、シュウォブが 1895 年 2 月にロンドンの文芸誌にフランス語で発表したスティーヴンソン論[1)]を取り上げる。シュウォブはスティーヴンソンを主題としたテクストを 4 本発表している[2)]が、サモアでのスティーヴンソン急死の報せを受けて執筆された 1895 年版のスティーヴンソン論は、若きフランス人作家が憧れ続けたスコットランド人作家に捧げた追悼文であると同時に、スティーヴンソン文学を語るシュウォブが、それをどのように受容し、どこに革新性を感じていたのかが明確に示されたテクストでもある。19 世紀末フランスにおいてそれほど知名度を獲得していなかったスティーヴンソンの文学から、シュウォブは何を学んだのだろうか。本稿でとりわけ着目したいのは、1895 年版スティーヴンソン論における『宝島』（*Treasure Island*, 1883）への言及である。亡き作家を追悼するテクストにおいて、自身にとって最も重要な作品である『宝島』を分析するシュウォブの言葉から、彼にとっての理想の文学とはいかなるものなのかをうかがうことができる。

以下、まず両者の交流についてシュウォブ研究から整理しその概要を示した後、1895 年版スティーヴンソン論における『宝島』への言及を手がかりとしながら、シュウォブの文学観とテクストの影響関係に着目しつつ論を進めたい。

1．サモアの師

本節では、先行研究をふまえつつ、シュウォブの視点からスティーヴンソンとの関係を押さえておきたい。シュウォブ研究において、スティーヴンソンは特権的な地位を占める存在である。最初の全集編纂者かつ評伝作家である文献学者ピエール・シャンピオンは、両者の関係性について以下のように述べている。

> マルセル・シュウォブの精神は、ついに会うことの叶わなかったロバート・ルイス・スティーヴンソンの思想にとらわれたものと言っていいだろう。幼き日のシュウォブの才能を目覚めさせたのはエドガー・アラン・ポーであったが、人生のあらゆる時期

において、イマジネーション豊かで創造的な感動を与え続けたのはロバート・ルイス・スティーヴンソンなのである[3)]。

シュウォブの友人でもあったシャンピオンの見解を引き継ぐように、2002年のほぼ同時期に異なる出版社から上梓された二つの『マルセル・シュウォブ著作集』の編者たちも、それぞれの序文でシュウォブにおけるスティーヴンソンの重要性についてふれている。フランスとアメリカの研究者たちが編者に名を連ねるベル・レットル版の序文でピエール・ジュルドは、「若くして彼は自分の分身を発見した。その名をロバート・ルイス・スティーヴンソンという。この分身はいくつもの分身の物語を書きながら、自身も二重人格の虜となっていた[4)]」と述べ、シュウォブがスティーヴンソンの「分身」としてハイネの「青白きドッペルゲンガー」を贈られたという挿話を引用しつつ両者の密接な関係を紹介する。一方、2000年に独自の一次資料を用いて新たなシュウォブの評伝[5)]を発表したシルヴァン・グドマールは、フェビュス版の序文で「スティーヴンソンを発見したことはシュウォブにとって最も重要な出会いであった。おそらく英語版が出たばかりの『宝島』を読んだ時から、シュウォブはスコットランド人作家に夢中になったのである[6)]」と、『宝島』によってシュウォブの人生に大きな影響を与えたスティーヴンソンの存在を重視している。奇しくも、異なる方針によって編集された『著作集』のそれぞれの序文において、ジュルドもグドマールもともに、他の作家たちに先んじてまずスティーヴンソンの名を挙げている。二つの『著作集』が出版されて以降徐々に活性化しているシュウォブ研究においては、スティーヴンソンを「憧れの分身であり、理想的な創作者であり、偉大なる師[7)]」と位置づけるのが共通の認識であると言えるだろう。

実際に対面することのなかった両者ではあるが、書簡による交流は行われている。フランスとアメリカ、次いで南太平洋を行き来した両者の文通については、シュウォブが保管し、スティーヴンソンの死後にシドニー・コルヴァンに託した四通がスティーヴンソン全集に収められている[8)]。おそらくシュウォブはそれ以上にスティーヴンソンへ書簡を送っていたと思われるが、その内容はスティーヴンソンからの返信によって推測することしかできない。

あなたからのお手紙の快い調子が私をエゴイストにするのです。おかげで私は自分をひとかどの人物だと思ってしまいます。私は人生のある時期をフランスで過ごし、あなたの国やそこに住むたくさんの人々を愛しました。［中略］その間、天使や英雄がペンを執ったかのようなものを私が書いたとしてもフランスの人々は誰も気付かないだろうと悟り、悔しい思いをしておりました。

それが今、マルセル・シュウォブさんが心のこもった励ましを送って下さり、私の作品を読み、理解し、ありがたくもこの仕事を気に入って下さる[9)]。

シドニーから投函された 1890 年 8 月 19 日付けのシュウォブ宛て書簡からは、フランスで理解者を得たスティーヴンソンの喜びが伝わってくる。当時、『宝島』や『ジキル博士とハイド氏』（*Dr.Jekyll and Mr.Hyde,* 1886）はすでにフランス語版が出版されていたが、スティーヴンソンはまだ「イギリスの不可思議な小説」の書き手としてしか認識されていなかった[10)]。そのような状況を歯がゆく思っていたであろうスティーヴンソンに届いたのが、自分の文学を賞賛するフランス人の作家志望の若者シュウォブからの手紙であった。その意味でシュウォブは、フランスにおけるスティーヴンソンの最初期の読者であり理解者であったといえるだろう。同日の書簡にスティーヴンソンが書いた「私たちが生きてお目にかかる機会は千に一つもないでしょう」という言葉の通り、同時代を生きた両者が対面することはなかった。それでも、サモアに住むスティーヴンソンとの書簡を通した交流は、作家を志す若きシュウォブにとってこの上なく重要なものであった。そのことを端的に示すのが、シュウォブが自身のデビュー作を当時のフランスでそれほど知名度のない、サモアに住むスコットランド人作家に捧げたという事実である。

1891 年、シュウォブはすでに文芸誌上に発表していた 34 本のコント[11)]を収録した第一コント集『二重の心』を発表する[12)]。スティーヴンソンに捧げられた『二重の心』は、シュウォブの師に対するオマージュに満ちている。例えば「二重の男」（« L'Homme double »）は、『ジキル博士とハイド氏』をそのままトレースしたかのような、二つの人格を持つ犯罪者を描いたコントである。もちろん、それは盗用と言うよりも、フランスの読者にスティーヴンソンのアイディアを紹介しようとするものであった。スティーヴンソンがジキル博士によって具現化した「二重性」という概念は、シュウォブがスティーヴンソンその人の作家としての美点であると高く評価するものだった。1894 年にシュウォブはこう述べている。

> 例えではあるが、ジキル博士に与えた二重性をスティーヴンソンその人に当てはめることができるのではないか。彼は「海賊」の魂と、洗練された説教師の魂も持っているのだ。その想像力は俊敏な大胆さをそなえ、理性は精妙な論理をそなえている。私たちを殺人者の前に連れて行き、身の毛もよだつような人殺しを描いたかと思えば、会話をめぐるエッセーでは座談の名手のいろいろなタイプに付きもののニュアンスの微妙な違いを巧みに解き明かす。彼は野蛮人かつディレッタントである。
>
> だからロバート・ルイス・スティーヴンソンは古今の文学において唯一無比なのである[13)]。

自らの第一コント集のタイトルにシュウォブが採用した「二重」という語は、サモアに住む『ジキル博士とハイド氏』の作者への目配せでもあることは間違いないだろう。当時『ジュルナル』や『エコー・ド・パリ』といった文芸誌の編集者として活動しながら文壇にネットワークを築いていたシュウォブは、自作を誰に捧げるのかについて戦略的に考えていた

ふしがある。翌年に出版される第二コント集『黄金仮面の王』では、収録した 17 篇のコントをそれぞれフランス文壇の関係者たち 17 人に捧げている[14]とを考慮すれば、シュウォブが文壇と関わりの無いスティーヴンソンに第一コント集を丸ごと捧げることによって出発したことは、それ自体が一種の決意表明であり、作家としてのシュウォブを考えるさいに等閑視することのできない重要な事実なのである。たとえ直接の対面はなくとも、作家シュウォブにとってスティーヴンソンはまぎれもない師であった。

2．シュウォブにとっての英語

前節で確認したように、シュウォブはフランスにおけるスティーヴンソン最初期の読者であったが、そのいち早い「発見」を可能にしたのがシュウォブの英語力であった。本節では、1895 年版スティーヴンソン論の読解を始めながら、スティーヴンソンとの出会いの媒介となったシュウォブと英語との関わりについて確認したい。スティーヴンソンのサモアでの急死の報を受けたシュウォブは、自身の作家としての方向性を決定づけるほどのインパクトをもった『宝島』の読書体験から亡き師への追悼のテクストを書き起こしている。

> 初めてスティーヴンソンを読んだときに投げ込まれた想像力の興奮状態のようなものを私ははっきりと覚えている。それは『宝島』だった。南仏へ向かう長旅の途中で読もうと持っていたのだ。鉄道の揺れる照明の下で私の読書は始まった。客車の窓ガラスが、南仏の夜明けを受けて赤い色合いを帯びるころ、私は読書の夢から目覚めたのだ。ジム・ホーキンスが、「8 レアル銀貨！ 8 レアル銀貨！」というオウムのけたたましい声で目覚めたように。私の目の前には、「ハムのように大きな顔をして、その目は大きな顔に空いた小さな穴のようでいてガラスのかけらのように光っている」ジョン・シルヴァーがいたのだ。［中略］
>
> こうして私は否応なしに文学の新たなる創造者の力に感服し、それ以来私の心は目にしたことのない色彩のイメージ、耳にしたことのない音色の虜になると知ったのだ。（*RLS*, p. 153）

この体験が 1884 年夏の出来事であることは明らかになっている[15]が、注目すべきは、当時ルイ大王校の学生であった 17 歳のシュウォブが 1883 年に出版されたばかりの『宝島』を原書で読んでいたという事実である[16]。フランス文学史においては、19 世紀末に博識と技巧とによって数多くのコントを発表した象徴派作家として名を残すシュウォブであるが、彼が英語に堪能な英米文学の愛好者であったことはそれほど知られていない。一方、英語圏におけるフランス文学研究においては、ときおりシュウォブの英語力について言及されることがある[17]。なぜシュウォブは、リセ時代から原書でスティーヴンソンを読むことができたのだろうか。実のところ、シュウォブは教育熱心な両親の方針により幼い頃

から家庭教師について英語とドイツ語を学んでいた。シュウォブの両親は、自分たちの親の代に革命によって解放されたユダヤ教徒の子弟が社会的上昇を果たすためには、何よりもまず教育が重要であることを理解していた。そのような信念のもと、パリのリセに進学しグランゼコール入学の準備をするというレールがシュウォブには用意されていたのだ。シュウォブが幼い頃から英語を身につけていた背景には、社会進出の足がかりとなるようできる限りの教育を与えようとするユダヤ系フランス人家庭の戦略があったのである。

シュウォブが実際に英語に堪能であったことを多くの同時代人が証言している。14 歳で親元を離れ入学したルイ大王校で同級生となったレオン・ドーデは、当時のシュウォブについて「英語とドイツ語を流ちょうに話す多言語使用のユダヤ人であった[18)]」と回想している。リセの教室で出会いやがて親友となった両者は 1894 年にともにイギリス旅行に出かけるが、ロンドンのオックスフォード・ストリートで「ディケンズやクィンシーによって描かれたゆかりの場所を見つけては子どものようにはしゃいだ[19)]」という、ドーデが伝えるシュウォブの姿からは、シュウォブがいかにイギリス文学を愛好していたのかを知ることができる。また、ある晩のドーデ家の晩餐会に出席したエドモン・ド・ゴンクールは、即興でダニエル・デフォーをフランス語に訳しながら朗読したシュウォブについて「とても魅力的な翻訳者である」と日記に書き残している[20)]。ゴンクールの記述を裏付けるように、シャンピオンは「多言語からなる蔵書の中で、とりわけシュウォブが愛読し、声に出して朗読することを好んだのは英語の書物だった。子どもの頃から習得していた英語は彼の母語と一体化していたのだ。彼は中国人の使用人とは英語で会話していた[21)]」と証言する。

加えて、あまり注目されることのない事実ではあるが、シュウォブは英米文学の翻訳者としていくつかの作品を出版している。シュウォブがコント作家としてフィクションを創作していたのは 1889 年から 1895 年の約 6 年間に過ぎないが、病によって創作活動の中断を余儀なくされた後も、彼は寡作ではあるものの英米文学の翻訳を続けている[22)]。シュウォブが翻訳にたずさわったのは、いずれも彼がその作品を高く評価し愛読していた作家たちであった[23)]。スティーヴンソンに関しては、1888 年に『宝島』の版元であるエッツェルに『黒い弓』（*The Black Arrow*, 1888）の翻訳を申し出るが実現せず[24)]、1899 年になって短編「水車小屋のウィル」（« Will O' the Mill », 1887）の翻訳を匿名で発表している[25)]。

教育を何より重視する家庭の方針によって英語を習得したシュウォブであったが、結局のところ、エコール・ノルマルの受験に二度失敗し、両親の望みを叶えることはできなかった。しかし、幼い頃から学び始めた英語によって翻訳を介さずに英米の文学に親しんでいたことがフランスでいち早くスティーヴンソンを「発見」することにつながり、『宝島』との出会いによってシュウォブの文学観が形作られていくのである。

3．「非現実的なリアリズム」

さて、1895 年版スティーヴンソン論においてシュウォブは、17 歳で衝撃を受けた『宝島』

を素材として、このスコットランド人作家がいかに優れているのか論じている。シュウォブが着目するのは、スティーヴンソンの描写における「非現実的なリアリズム」である。

> ここでスティーヴンソンにおける能力の特殊性について述べてみたい。自分が間違っていなければ、この能力は他のどの作家たちよりも衝撃的で魔術的なものとなっている。その理由は、彼の写実性がロマン主義に根ざしている点にあると思われる。あるいはこう書いても良いだろう。スティーヴンソンの写実性は完璧なまでに非現実的であり、だからこそ彼は全能なのであると。スティーヴンソンは必ず想像力の目で物事を見ている。ハムのような顔をした人間などいるわけがないのだから。[中略]
>
> それは非現実的なイメージである。人間の目は、どんな目であっても私たちがよく知る世界ではそのようなイメージを見ることができないのだから。それでもこうしたイメージは文字通り現実の精髄なのである。(*RLS*, p. 157)

片足の海賊ジョン・シルヴァーを「ハムのような顔」と描写することによってスティーヴンソンは「現実のイメージよりもさらに強烈なイメージ」を喚起することに成功している(*RLS*, p. 157)。それは、ペンによって現実を模写するのではなく「舞台装置によって物語の展開の輝きを強める」ような「ロマン派的」かつ「非現実的なイメージ」なのである(*RLS*, p. 157)。シュウォブにとって、現実世界の写実的な描写ではない「非現実的なリアリズム」によって現実の精髄を描き出すことがスティーヴンソンの真骨頂であり、最も高く評価すべき特徴である。シュウォブによれば、スティーヴンソンはデフォー、ポー、ディケンズといった英米作家たちの系譜上に位置づけられるものである(*RLS*, p. 155-156)。周囲の若き作家たちと同様に、当時のシュウォブは、自然主義の手法によって現実を描写する文学に限界を感じていた。スティーヴンソンに捧げた『二重の心』の序文においてシュウォブは、19 世紀のフランスにおいては、文芸は演繹の方向を目指し、科学は帰納の方向を目指しており、その「綜合」こそが必要であると主張している。若きシュウォブが文壇でのデビューにあたって発表したマニフェストといえるこの序文は、理論先行といった印象を抱かせる生硬かつ難解なもので、ここで語られる「綜合」がどのような概念なのかを明確に定義することは難しいが、個々の事象から普遍的な法則を導く帰納と、その対概念である演繹を融合することによってシュウォブが新たな文学の方法を模索していることは間違いない。

> 綜合とは、個人的心理の構成要素を収集すれば実現できるという性質のものではないし、鉄道、鉱山、証券取引所、軍隊などの細かな描写を集めれば成り立つものでもない。
>
> 以上のような理解だと、綜合はただの列挙である。ひとつながりに続く個々の瞬間に様々な類似点を見いだし、そこから何らかの一般観念を作者が取り出そうとすれば、

サロンの恋愛だろうが、パリの胃袋だろうが、どの場合でも凡庸な抽象になってしまう。生は一般的なものではなく、まさに個別的なものの中にあるのだ[26)]。

名こそ挙げていないものの、シュウォブはここでエミール・ゾラの自然主義やポール・ブールジェの心理主義を批判的に取り上げている。先行研究においても論じられることの少ない『二重の心』序文を、後年のスティーヴンソン論と読み合わせてみれば、「非現実なイメージが彼の著作の本質である」（*RLS*, p. 157）と結論づけるシュウォブが理想としたのは自然主義流にあらゆるものをそのまま描写することではなく、海賊の顔を「ハム」と表現するように、現実ではありえないイメージによって「個別的なもの」を生き生きと描き出すことであったことがうかがえる。反自然主義の立場を取るシュウォブにとって、『宝島』に見いだした「非現実的なリアリズム」は、英米文学の伝統を引き継ぐスティーヴンソンから学び、自らの創作に取り入れるべき手法であった。

シュウォブのテクストのなかで『宝島』との影響関係が度々指摘されるのが第六コント集『架空の伝記』である[27)]。J・オーブリーやJ・ボズウェルといったイギリスの伝記作家たちにならってシュウォブが古今東西の人物の生涯をスケッチした『架空の伝記』について、研究者ブルノ・ファーブルは、その人選とモチーフにおいて『宝島』の影響が強いことを詳細に分析している[28)]。「伝記作家は真実であろうと心がける必要はない。さまざまな人間的特徴の混沌の中から創造しなければならないのだ[29)]」と序文で宣言するシュウォブは、登場人物の生涯を描くにあたって、それが伝記的に事実であるかということよりも、その人物の細部に関する挿話から想像を膨らませ、その本質を明らかにしようとした。『架空の伝記』という連作のコンセプトそのものが「非現実的なイメージによって現実の精髄を描き出す」というスティーヴンソンの手法にならったものと言えるだろう。

4．複数の語りの並置という手法

『宝島』の影響が色濃い『架空の伝記』は、1894年12月のスティーヴンソンの死の時期の前後に執筆されている。当時のシュウォブは、同郷の出版人フェルディナン・ソーが立ち上げた『ジュルナル』の編集に関わり、そこで自由に自作を発表できる立場にあった。1894年7月に発表された「ステッド・ボニット大佐の物語」を除けば、『架空の伝記』に収められたコントは全てスティーヴンソンの死後、1895年版スティーヴンソン論の執筆と並行して構想されている。さらに着目したいのは、この時期のシュウォブは、スティーヴンソン論、『架空の伝記』の執筆に加えて『少年十字軍』（1896）を構成する八篇のコントを手がけていたという事実である[30)]。スティーヴンソン論が『ザ・ニューレヴュー』誌に発表された1895年2月には、『架空の伝記』と『少年十字軍』に収録されるコントがそれぞれ二本ずつ『ジュルナル』に掲載されており、これらのテクストがサモアの師を強く意識した状況で執筆されたことが推測される。

先行研究においてスティーヴンソンの影響についてほとんど言及されることのない『少

年十字軍』であるが、1895 年版スティーヴンソン論を媒介とすると、その影響関係が浮かび上がる。それは『二重の心』や『架空の伝記』に見られるようなモチーフにおけるオマージュではなく、テクストの形式に関するものである。シュウォブは、『宝島』における語りの構造についてこう分析している。

> ロバート・ルイス・スティーヴンソンの本を取り上げてみよう。これは何の本なのだろうか。一つの島、ある財宝、海賊たち。誰が語るのだろうか。この冒険に遭遇した一人の少年。オデュッセウス、ロビンソン・クルーソー、アーサー・ゴードン・ピムなども同じようなやり方で窮地を逃れている。ただし、ここではそれぞれの語りの交差点がある。同じ事実が二人の語り手――ジム・ホーキンスと医者のリヴシー先生によって述べられる。ロバート・ブラウニングは『指輪と書物』を書く際に似たようなやり方をすでに思いついていた。スティーヴンソンは同時に彼の語り手たちにドラマを演じさせている。他の登場人物たちがとらえた事実の詳細についてくどくど述べる代わりに彼が読者に提示するのは異なる二つもしくは三つの視点でしかない。すると背後では闇がひろがり、謎の不確かな世界を作り出す。（*RLS*, p. 155）

シュウォブが言及しているのは、『宝島』第四部において、物語の語り手が突然ジム少年から船医のリヴシーに代わる場面である。この視点の交代によって、これまでのジムの語りからは見えなかった状況が読者に提示される。同時に、今度はリヴシーの語りの間にジムが目撃したことが読者に隠されたままとなる。詩において語りの並置を採用したイギリス詩人の手法にも言及しながらシュウォブが評価するのは、『宝島』においては、語り手が二人存在することによって物語の全体像が浮かび上がるのではなく、かえって謎が深まるという効果がもたらされることなのである。シュウォブはその手法について「ここでの技巧は、はっきり言わないことにあるのだ」（*RLS*, p. 155）と指摘する。このように『宝島』における語りの構造を分析するシュウォブが、このスティーヴンソン論と同時期に執筆していたのが『少年十字軍』であった。

「十字軍時代にヨーロッパ各地の子どもたちが突如として自発的に集団となって聖地奪回のためにエルサレムを目指した」という歴史事件に取材した『少年十字軍』は、シュウォブが 1895 年 2 月から 4 月にかけて『ジュルナル』に発表した八つの「語り = レシ」（récit）から構成されている。社会階層や宗教が異なる八人の語り手――托鉢僧、癩者、教皇インノケンティウス三世、少年十字軍兵士、回船業者、回教僧、幼いアリス、教皇グレゴワール九世――たちは、それぞれの視点から自身が目撃し、関わった出来事について証言する。複数の語りの並置によって構成されたテクストである『少年十字軍』であるが、重要なのは、『宝島』においてスティーヴンソンが試みたのがジム少年とリヴシー医師という二人の間での話者の交代であったのに対して、シュウォブは一つの事件を複数の語りから浮かび上

がらせる手法をとったという点である。『宝島』における話者の交代は、いわば視点の交代であり、それぞれの話者が認識できなかった部分が読者に謎として残され、それが物語の推進力となっている。一方、『少年十字軍』においては、一つの事件が、八人の語り手によって証言され、情報が錯綜するなかで、子どもたちを襲った悲劇的な結末が最後のグレゴワール九世の語りに集約され明らかになるという構造を持っている[31)]。シュウォブは、二人の話者が交代する『宝島』におけるスティーヴンソンの「はっきり言わない」という技巧を高く評価し、語りの並置を言う手法を取り入れたうえで、自身の創作においては、得意とする短い物語形式による語りを並置することによって、複数の視点から中世の宗教的事件の悲劇的側面を浮かび上がらせることを試みた。『少年十字軍』は、『宝島』におけるスティーヴンソンの手法をシュウォブが受け継ぎ、コント作家として更新したものとみなすことができるだろう。

結びとして

本稿ではここまで、1895 年版スティーヴンソン論における『宝島』への言及を中心に、シュウォブが師と仰いだスコットランド人作家の何を評価し、それをどのように自らのテクストに活かそうとしたのかを考察してきた。シュウォブが何よりも評価したのは、スティーヴンソンの「非現実的なリアリズム」であり、それは自然主義に反発する若き作家がデビューするに当たっての指針となるものであった。作家としてのシュウォブが常にスティーヴンソンを理想とし、その手法を自らのテクストに取り入れようとしたことは、『架空の伝記』や『少年十字軍』からうかがうことができる。

> 悲しいことに、私たちはもはや彼の「心の目」で何も見ることはできない。なおも彼の心のなかにあったはずの数多くの美しい夢幻の光景は全て、海の泡に輝く縁飾りからそれほど離れていない場所であるポリネシアの狭い墓に眠っている。穏やかにして悲劇的な生をめぐる最後のイメージもまた非現実的なイメージである。「元気なうちに私たちが会う機会はほとんどないように思われるのです。」と彼は私に書いた。悲しいことにそれは本当だった。私にとって彼は、いまでも夢の光に包まれたままである。そしてこのささやかな数ページは、明るい夏の夜に読んだ『宝島』のイメージが私に吹き込んだ夢を解釈する試みに過ぎないのだ。（*RLS*, p. 160）

シュウォブのスティーヴンソン論は、改めて作家の死を悼み、最後に再び『宝島』を読んだリセ時代の夏の記憶にふれて結ばれる。それは、シュウォブにとって『宝島』との出会いがいかに決定的であったかを物語っている。常にスティーヴンソンを意識しつつ作家活動を続けてきたシュウォブであったが、スコットランド人作家の死と同時期に執筆した『架空の伝記』と『少年十字軍』をもって、そのコント作家としてのキャリアは実質的に

終了する。腸の病の発症により創作意欲を失ったシュウォブは、以降、死に至るまでの約10年間をジャーナリズムへの寄稿や翻訳、言語学者としての研究活動に費やすことになる。時に死線をさまようほどの闘病生活を送りながらも、1901年8月、シュウォブは南太平洋での転地療法を口実に家族から資金を集め、サモア島へと旅立つ。スティーヴンソンの墓参をして作家としての創作意欲を取り戻そうとするのがこの旅行の目的であったと言われているが、結果は悲惨なものであった[32)]。

シュウォブは、同時代を生き書簡を交わしながらもスティーヴンソンと対面することはできず、文字通り命がけで師の墓参を試みるがそれも叶わなかった。それでも、今日では冒険小説の代名詞として誰もが知る『宝島』をフランスにおいていち早く発見し熱狂したシュウォブ少年が、後に作家となり創作した数々のコントにスティーヴンソンは確かに息づいている。

注

シュウォブのテクストの引用に関しては既訳（『マルセル・シュオッブ全集』、大濱甫ほか訳、国書刊行会、2015年）を参照しつつ必要に応じて引用者が改訳している。フランス語文献に関しては、日付等もフランス語で表記している。

（1）Marcel Schwob, « R. L. S. », in *The New Review*, London, vol. XII, 1895, pp. 153-160. 以下 *RLS* と略記し引用の際は本文中にページ数とともに記載する。

（2）初出は次の通りである。« Robert Louis Stevenson », in *Le Phare de la Loire*, 27 août 1888; « Robert L. Stevenson », in *L' Événement*, 11 octobre 1890; « Le Dynamiteur », in *La Revue hebdomadaire*, 2 juin 1894. これらのテクストは全て Robert-Louis Stevenson, *Will du moulin suivi de M. Schwob/R.-L. Stevenson Correspondances*, édition établie par Francois Escaig, Allia, 1992.（以下 *Corr.* と略記）に収められている。

（3）Pierre Champion, *Marcel Schwob et son temps*, Bernard Grasset, 1927, p. 159.

（4）Pierre Jourde, « L'Amour du singulier », in *Marcel Schwob, Œuvres*, Textes réunis et présentés par Alexadre Gefen, Les Belles Lettres, 2002. P. 15. 以下 *Œuvres* と略記。

（5）Sylvain Goudemare, *Marcel Schwob ou les vies imaginaires*, Le Cherche-Midi, 2000.

（6）S. Goudemare, « Comment était faite la lampe d'Alladin ? », in *Œuvres de Marcel Schwob*, éditon établie et présentée par S. Goudemare, Phebus, 2002, p. 17.

（7）Bruno Fabre, *L'Art de la biographie dans Vies imaginaires de Marcel Schwob*, Honoré Champion, 2008, p. 77.

（8）*The Complete Work of R.-L. Stevenson*, vol. XXIII, Edited by Sidny Colvin, New York, W. Heineman Ltd, 1923. シュウォブは最初のスティーヴンソン全集に書簡が収められた唯一のフランス人作家である。

（9）*ibid*., pp. 253-254.

（10）S. Goudemare, *op.cit*., p. 64.

（11）フランス文学における小説の一形式。19 世紀末においては幻想、驚異、神秘、回帰、奇跡などを扱い読者を幻惑し驚嘆させる短編の物語という了解があった（『世界文学大事典 5』、集英社、1997 年、304-305 頁）。

（12）M. Schwob, *Cœur double*, Ollendorff, 1891.

（13）M. Schwob, « Le Dynamiteur », in *Corr*., p. 75.

（14）M. Schwob, Le *Roi au masque d'or*, Ollendorff, 1892. シュウォブはこの第二コント集の表題作をアナトール・フランスに捧げ、他のコントは文壇の仲間（レオン・ドーデ、ポール・クローデル、ジュール・ルナール等）や年長の恩人（アルフォンス・ドーデ、エドモン・ゴンクール、カチュル・マンデス等）らに偏りなく「分配」している。

（15）S. Goudemare, *op.cit*., p. 49.

（16）『宝島』のフランス語訳がエッツェルにより出版されるのは 1885 年である。R.-L. Stevenson, *L'Ile au trésor, trad*. par André Laurie, J. Hetzel et Cie, 1885.

（17）フランスにおけるウォルト・ホイットマン受容について論じる B・アッキーラは、「他のフランス人ホイットマン愛好家とは違ってシュウォブは英語に堪能であったので、早い時期からその詩を読むことができた」とシュウォブの英米文学受容の先進性を指摘している。Cf. Betsy Erkkila, *Walt Whitman among the French: Poet and Myth*, New Jersey, Princeton University Press, 1980, p. 102.

（18）Léon Daudet, « Fantômes et vivants » [1914], dans *Souvenirs et polémiques*, Robert Laffont, 1992, pp. 63-64.

（19）L. Daudet, « L'Entre deux-guerres » [1915], *op. cit*., p. 278.

（20）Edmond et Jules de Goncourt, *Journal, Mémoire de la vie littéraire*, vol. III(1887-1896), Robert Laffont, 1989, p. 927, 4 mars 1894.

（21）P. Champion, « Marcel Schwob parmi ses livres » [1926] , in *Catalogue de la bibliothèque de Marcel Schwob*, Allia, 1993, pp. 27-28.

（22）シュウォブが翻訳した英語文学は次の作品である。年代順に初出の発表媒体とともに示す。Oscar Wilde, « Le Géant égoïste », in *L'Écho de Paris*, 1891; Daniel de Foe, *Moll Flanders*, Ollendrff, 1895; R.-L. Stevenson, « Will du moulin », (anonyme), in *La Vogue*, mars 1899; Thomas de Quincey, « Les derniers jours d'Emmanuel Kant », in *La Vogue*, avril 1899; William Shakespeare, *La Tragique histoire de Hamlet, Prince de Danes*, en collaboration avec Eugène Morand, Charpentier et Fasquelle, 1900; Francis Marion Crawford, *Francesca da Rimini*, Charpentier et Fasquelle, 1902.

（23）ワイルドに関しては個人的な交友関係もあった。1892 年、『サロメ』をパリの書店から出版するために訪れたワイルドをジャン・ロランとともに饗応し、フランス語校閲を補助したのがシュウォブであった。Voir. Jean Lorrain, *Lettres à Marcel Schwob et autres textes*, édition d'Éric Walbecq, Tusson, Du Lérot, 2006.

（24）『宝島』の版元であるエッツェルに自らの翻訳を打診した書簡においてシュウォブは、著者から 20 ポンドで『黒い弓』の翻訳を許可するという了解を得ているとし、自らの照会先とし

てナントで父と親交のあったヴェルヌや恩師のM・ブレアルの名を挙げている。M. Schwob, « Lettre à J. Hetzel » in *Corr*. pp. 91-92.

（25）R.-L. Stevenson, « Will du moulin », in *La Vogue*, mars 1899. シュウォブの評伝においてグドマールは、「水車小屋のウィル」の匿名の翻訳者がシュウォブであることを、A・ジッドが1899年5月10日の『エルミタージュ』誌に掲載した「アンジェルへの手紙」での言及から裏付けているが、草稿等の物的な痕跡は発見されていない。Cf. S. Goudemare, *op.cit*., pp. 239-240.

（26）M. Schwob, « La terreur et la pitié », in *Œuvres*, p. 613.

（27）M. Schwob, *Vies imaginaires*, Charpentier et Fasquelle, 1896.

（28）『架空の伝記』の登場人物のうち、ファーブルがスティーヴンソンへの影響を指摘するのは四人――「宝探しのウィリアム・ヒップス」、「海賊キャプテン・キッド」、「文盲の海賊ウォルター・ケネディ」、「気分屋の海賊ステッド・ボニッド少佐」――である。Cf. B. Fabre, *op.cit*., pp. 157-170.

（29）M. Schwob, « L'art de la biographe », in *Œuvres*, p. 633.

（30）『架空の伝記』の20篇は1894年7月から1896年12月にかけて断続的に、『少年十字軍』の八篇は1895年2月から4月にかけて集中的に、いずれも『ジュルナル』に発表されている。

（31）この観点からの分析については拙稿「世紀末のユダヤ系作家――マルセル・シュウォブ『少年十字軍』をめぐって」、『フランス語フランス文学研究』、日本フランス語フランス文学会、第90号、2007年、168-181頁を参照されたい。

（32）現地の生活になじむことができず病を悪化させたシュウォブは、師の墓参を果たすことができないまま「サモアに関する美しい話はすべてでたらめだ」という言葉を残し命からがら帰国することになる。旅行の顛末については、旅先から妻マルグリット・モレノに送った書簡から知ることができる。Voir. Bernard Gauthier, « Le Voyage vers Samoa », in *Marcel Schwob, L'Homme au masque d'or*, Nantes, Bibliothèque municipale de Nantes, 2006, pp. 136-149 および拙稿「マルセル・シュウォブのサモア旅行」、『国際文化研究紀要』、横浜市立大学、第17号、119-140頁、2010年。

Marcel Schwob's Essays on Stevenson

Shigechika SUZUKI

In the summer of 1884, young Marcel Schwob encountered Robert Louis Stevenson's *Treasure Island* (1882) while riding on a train to Marseille for a vacation. Schwob saw the Scottish writer, who was almost completely unknown at the time in France, as a "new creative force in literature," and continued to look to him as a master throughout his life.

After reading *Treasure Island*, Schwob continued making approaches to his revered Stevenson in various forms. The approaches were so persistent that they could be called a kind of fixation. Some prior studies have discovered Stevenson's strong influence on Schwob as well as Schwob's homages to Stevenson in his texts. This is clear from the countless essays that Schwob published in which he mentioned Stevenson. In real life as well, Schwob continued writing letters to Stevenson, who had traveled to the South Pacific and was living in Samoa, and Schwob dedicated his first short story collection to Stevenson. In 1901, when he was in his later years, despite his frail health, Schwob traveled to Samoa in order to visit the grave of his master, whom he had never been able to meet face-to-face. It can thus be said that Schwob, as an author, was under the influence of a Scottish writer whom he never once met.

What did Schwob, who saw the "Master of Samoa" as the ideal writer, see in Stevenson's literary works? This study focuses on the references to *Treasure Island* in the many essays about Stevenson left behind by Schwob and examines the relationship between the two writers from both biographical and literary viewpoints.

Keywords: Marcel Schwob, Robert Louis Stevenson, Jewish people, Anglo-French relations, multiple narrators